

受賞の トバ



第14回

『このミステリーが すごい!』大賞

エンターテインメントを第一義の目的とした
広義のミステリー小説を募集。選考委員は大森望、
香山三三郎、茶木則雄、吉野仁。受賞者には賞金
1200万円が贈られ、受賞作は刊行される。

主催 宝島社

推敲という快楽

わたしの 아이폰 には、公募カ
イドのリンクがお気に入り登録さ
れています。以前から大変お世話に
なつたこの媒体で、このたび自身の
文章を掲載していただけたというこ
とを、とても光栄に思っております。

わたしの小説執筆の原点は、大学
受験のときから訓練を受けていた、
「ディスクリプション」とよばれる
美術作品を描写する行為です。西洋
の宗教画から国宝の壺まで、その造
形的特質を探るために、ひたすら見
てこぼにすること。作品を見たこ
とのない人に、どう言えはこの作品
が伝わるかという気持ちで、四苦八

苦してことばを選びぬいた経験が、
わたしの文章を支えています。

推敲ということばは、口バに乗っ
て詩をつくっていた男が、ある一行
で門を「推す」か「敲く」か、どち
らの句が相応しいか夢中で迷ってい
たら、偉い人に当たり捕らえられ事
情を話したところ、偉い人が「敲く
がいいんちゃう」と言った、という
故事に由来するそうです。まさに執
筆そのものを表していると思います。

わたしはプロット完成ののち一気
に執筆ゴー！するタイプなので、猛
烈にキーボードを叩いていたら、打
ち間違ひがあるわあるわ。オーク書
な（オークショナー）とか。おそ
らく物語が完成に近づいていくのは、
推敲がはじまってからです。推敲し
ていくうちに、書き足したい表現や
ミステリーの真相が、ぼろぼろと垢

のように出てくる。美術品を理解す
るためにことばにする行為とおなじ
ですね。決して上手くできないし、
苦しいんだけど止められないのです。

今回の受賞作『神の値段』は、そ
んなわたしが推敲という苦しい快楽
を味わいつくした美術ミステリーで
す。美術畑出身でありながら、美術
を本格的に題材にしたミステリーを
書くのは、これがはじめてでした。

美術の仕事はこれからも続けていき
たいので、仕事と小説執筆を両立さ
せられるよう頑張ります。

さいごに『このミステリーがすご
い!』大賞について。『このミス』
大賞は一次選考に通ればもれなくコ
メントがもらえるという、すばらし
い特色があります。他の賞に多く応
募してきた方ほど、ぜひおすすめし
ます。



一色 さゆり

いっしき・さゆり

1988年、京都府生まれ。東京藝術大学
美術学部芸術学科卒業。ギャラリー勤務
を経て、現在は香港中文大学大学院美術
学部在籍。受賞作『神の値段』は宝島社よ
り2月10日発売予定。

受賞作品

NOW
PRINTING

『神の値段』

一切人前に姿を見せない前衛芸術家・川
田無名。唯一繋がりを持つギャラリスト・
唯子が、その三億円の幻の作品を選び出
してきた後、死体で発見された。アンソ
ニタの佐和子は、唯子の死の真相、作
品を選び込んだ意図、無名の行方を探り
始める。美術界を巡る傑作ミステリー！